

ポスドク研究者、大学院博士後期課程学生等国際学会派遣プログラム	
The Impact of Working Mothers' Internet Use on Effectiveness of Parenting and Grandparents-Mothers' Relationship: A Japan-U.S.A. Comparison	
氏名 相川 頌子	所属 ジェンダー学際研究専攻
期間	2018 年 11 月 7 日～ 2018 年 11 月 11 日
学会・分科会名	2018 National Council on Family Relations Annual Conference
場所	アメリカ合衆国（サンディエゴ）
発表者名、発表形式	大風薫・相川頌子、ポスター

内容報告

1. 全米家族関係学会¹

全米家族関係学会は、1938 年に創設され、家族の研究、実践、教育に焦点を当てた世界最大の家族研究学会である。家族研究における中核となっている *Journal of Marriage and Family*、*Family Relations*、*Journal of Family Theory and Review* の 3 つの雑誌を発行している学会でもある。年に 1 度開催される年次大会は、世界各国から研究者が集い、最先端の研究や方法、実践について議論する場となっている。本報告は、第 80 回の年次大会で行い、アメリカやカナダ、オランダ等の研究者や大学院生と意見交換をすることができた。

2. 本発表の内容

2.1 背景と目的

昨今、ICT の普及が進み、祖父母世代と親世代の交流が増加している(NTT Communications 2012)。これまでの研究では、祖父母からの対面での育児支援が、母親の効力感を高めることが指摘されてきた(Jang et al. 2017)。しかし、今や社会資源の一つとして考えられる ICT による育児支援が、母親にとってどのような影響があるのか、親と祖父母世代の関係をどのように変えるのかについては十分に検討されてこなかった。

以上から本発表の目的は、(1)どのような要因が、母親と祖父母世代との ICT による交流に影響するのか、(2)母親の ICT 利用が親効力感にどのように関連しているのか、(3)親効力感は世代間関係にどのように影響を与えるのか、時間的な制約がある働く母親に焦点を当て、明らかにすることである。また、ICT の利用が盛んな日本と米国のデータを比較し、日本の母親が置かれている現状について、示唆を得ることも目的である。

2.2 方法

使用するデータは、お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系 石井クンツ昌子教授を代表とする科学研究費補助金基盤研究(A)(課題番号 26242004)により実施された「IT 社会の子育てと家族・友人関係：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較から」の個票データの提供を受けたものである。日本のデータは、2016 年、米国のデータは 2017 年に収集された。分析に使用したのは、6 歳以下の末子があり、祖父母もしくは祖母が健在で、就労している母親である（日本：346 名、米国：490 名）。

2.3 主な結果

記述統計では、日本の母親の方が米国の母親に比べて、ICT の利用頻度・親効力感が低く、祖父母世代との交流も少ないことが示された。

また共分散構造分析では、(1)ICT を利用して、子育ての情報収集を頻繁に行う母親ほど、祖父母世代から育児に関する情報や情緒的な支援を得ている、(2)祖父母世代からの情緒的な支援は、日本人の母親の親効力感を高める、一方で米国の母親の親効力感が高めない、(3)親効力感が高いほど、世代間の交流が強まることが明らかになった。以上から、ICT を通じた育児に関する親世代からの支援は、

親効力感を媒介として、世代間関係に影響を与えている。

3. 議論

ポスター発表の場面では、研究の構想及び分析結果について議論があった。

まず研究の構想については、ICT と家族に関する研究は依然として不十分であり、貴重な研究であるとの意見があった。デジタルネイティブ世代がどのように成長し、家族関係を構築していくのか、縦断調査が必要とされている。

つぎに、分析結果についてである。日本の母親の効力感が米国の母親よりも低いのは、働く母親に対する社会の期待の違いではないかとの指摘があった。具体的には、日本の母親は育児を優先することを期待されているが、米国の母親は働くことへの期待も高い。一方で、日本と米国の母親は、社会的な要請よりも、そもそものパーソナリティが大きく異なるのではないかとの意見もあった。また、日本の母親が、米国の母親よりも ICT の利用頻度が低いことについて尋ねられた。この点に関しては、回線の利用料金、フリーWi-Fi の普及状況といったインフラの影響、ICT 利用への不安感の高さなどではないかと回答した。最後に、ICT を使って親に相談をする頻度が高いほど、日本では母親の効力感が高まるのに対し、米国では低くなることへの指摘である。そもそもの利用頻度が日米で違うため、米国では交流過多がストレスになる可能性が高いほか、「自立」に対する意識の違いではないかという解釈が多かった。

4. 反省と今後

ICT は現代の私たちの生活にとって必要不可欠であり、ICT と家族に関する研究は注目度が高く、多くの人と議論することができた。このような議論を通して、自分の研究の位置づけを再確認できただけでなく、新たな視点を得ることもできた。また ICT と家族にとどまらず、性別役割分業等、幅広いトピックに関して現状のヒアリングをすることもできた。

筆者にとっては、本学会が初めての国際学会への参加であった。米国での開催であったため、旅費などの心配があったが、本プログラムの支援を受けて参加することができた。大変貴重な機会をいただけたことに、感謝申し上げる。本学会での経験を糧に、今後も継続的に国際学会での報告を行いたい。詳細には、International Society for the Study of Behavioral Development が 2019 年 7 月に香港で開催する workshop にて発表するため、申請を行った。研究者としての実績を積み、視野を広げるためにも、国際学会への継続的な参加や報告が必要と考える。

最後に課題であるが、日本の実態や研究について、海外の研究者にはまだまだ知られていないことである。研究内容は時流に合っており聴衆の関心も高かったが、研究の目的や分析結果を説明する以前に、日本について長々と説明しなければならないこともしばしばあった。今後は、多くの研究者に日本の研究について知ってもらえるよう、英語論文として発信していくことが重要である。たとえば、本学会で得られた意見をもとに再考し、全米家族関係学会が発行する *Family Relations* などに投稿することができればと思う。

注

1. 全米家族関係学会 <https://www.ncfr.org/about>

参考文献

Jang, J., Hessel, H. & Dworkin, J. (2017) Parent ICT use, social capital, and parent efficacy, *Computers in Human Behavior*, 71: 395-401.

NTT コミュニケーションズ (2012) 石井クンツ昌子監修「親子間のデジタル・コミュニケーション」

あいかわ しょうこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 ジェンダー学際研究専攻

- ・ 英文タイトル : The Impact of Working Mothers' Internet Use on Effectiveness of Parenting and Grandparents-Mothers' Relationship: A Japan-U.S.A. Comparison
- ・ 英文氏名 : Shoko AIKAWA
- ・ 英文発表者名 : Kaoru OKAZE